

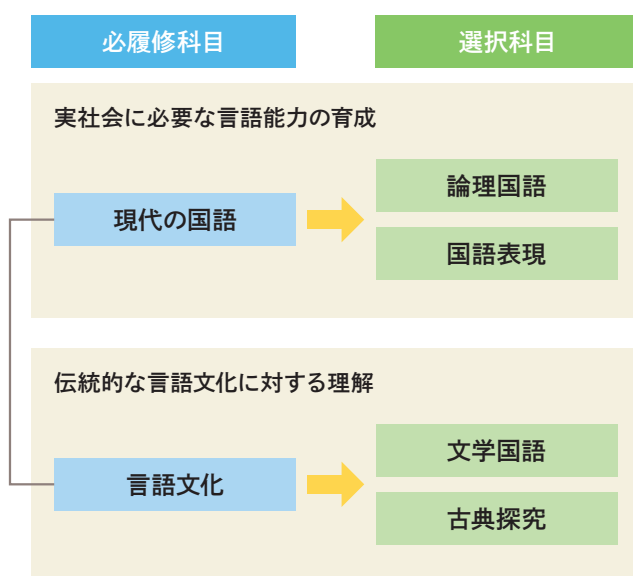
新たな科目が設置される教科の 検討ポイント

新教育課程編成で鍵となるのが、新学習指導要領で新たな科目が設置される教科です。ここでは、国語、地理歴史・公民、数学、情報の検討ポイントを解説します。

国語 選択科目を どう組み合わせるか

国語は、「実社会に必要な言語能力の育成」と「伝統的な言語文化に対する理解」という2つの観点で科目が再編成され（図1）、「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」が選択科目となりました。選択科目のうち、どの科目をどの年次で履修させるかが検討ポイントです。育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、大学進学者の多い学校では、「論理国語」「古典探究」を高校2年次から3年次に履修、就職者の多い学校では、就職後に生かせる表現力の育成を目的として「国語表現」を履修させるといった考え方ができます。

図1 国語の必修科目、選択科目と、その接続関係



新教育課程編成で 必要な視点・考え方

多くの学校で、既に2022年度入学生への教育課程の編成案が作成されている。今後は、5～6月に公開される予定の検定済み教科書見本の内容などを踏まえて、編成案の見直しを図っていくことになる。その際に必要となる視点や考え方について、ベネッセ文教総研が解説する。

西島一博
所長
ベネッセ文教総研

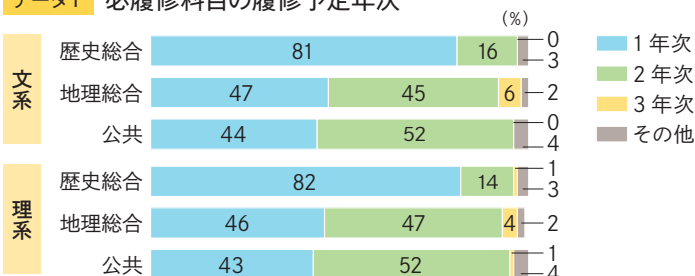


解説

地理歴史・公民 必履修科目の「地理総合」「歴史総合」「公共」をどの年次で履修するか

成年年齢の引き下げなどを踏まえて、「公共」は原則1・2年次で履修することとされています。地理歴史での探究的な学びを深めるため、選択科目の「地理探究」「日本史探究」「世界史探究」を履修させたい学校は、低学年次に必履修科目を修了させたいところですが、「地理総合」と「公共」は、2年次で履修という学校も少なくありません（データ1）。

データ1 必履修科目の履修予定年次

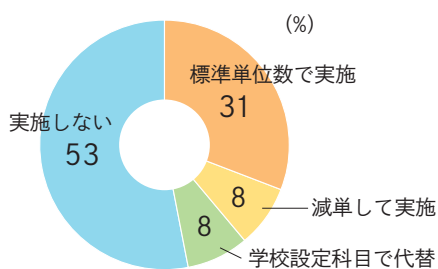


※ベネッセ教育情報センター「教育・入試改革対応に関する調査」速報結果（回答者 233人）より。

数学 文系における「数学C」の履修の有無

2025年度大学入学共通テストの出題科目として検討されている「数学Ⅱ、数学B、数学C」が、「数学B」の2項目の内容(数列、統計的な推測)及び「数学C」の2項目の内容(ベクトル、平面上の曲線と複素数平面)に対応した出題とし、そのうち3項目の内容の問題を選択して解答させることとしている点から、文系における「数学C」の取り扱いがポイントの1つになります（データ2）。

データ2 文系における「数学C」の取り扱い

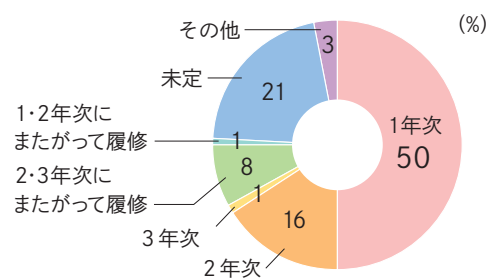


※ベネッセ教育情報センター「教育・入試改革対応に関する調査」速報結果（回答者 233人）より。

情報 必履修科目の「情報Ⅰ」をどの年次で履修するか

必履修科目「情報Ⅰ」の履修年次は、1年次とする学校が多いようです（データ3）。「公共（情報モラル）」「数学Ⅰ（データの分析）」などの他科目や、「総合的な探究の時間」と連携させられることが利点です。一方で、大学入学共通テストの出題科目として検討されている点を踏まえると、2年次以降も継続して「情報Ⅰ」の内容を踏まえた学習を続けられる工夫が求められます。

データ3 「情報Ⅰ」の履修予定年次



※ウェブセミナー「今から始める新教育課程『情報』の準備」第1回申し込み者のアンケート結果（回答者 207人）より。

その他にも

「公共」同様、成年年齢の引き下げなどを踏まえて1・2年次の履修が求められる「家庭基礎」の履修年次、4技能5領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」）の充実を図る英語の履修パターンなども、検討ポイントとして挙げられます。

視点 1

自校で育成を目指す資質・能力から考える

教育課程の編成にあたっては、新学習指導要領に「学校教育全体や各教科・科目等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にする」とあるように、資質・能力の3つの柱を踏まえて、自校で育成を目指す資質・能力を教育目標として定め、その実現のために必要な各教科・科目等の教育内容を組織することが求められます。すなわち、教育目標として掲げる資質・能力を育成する教育課程になっているかどうかという視点が重要で、「どの科目が、目標とする資質・能力の育成に寄与するか」「何年次に履修させると、その資質・能力を最も向上させることになるか」などと問いかけながら、履修科目や履修年次を検討するとよいでしょう。

自校で育成を目指す資質・能力の1つである「情報活用能力」は、低学年次から育成したいので、「情報Ⅰ」は1年次に履修させたい

卒業後に就職する生徒も多い本校は、育成を目指す資質・能力として「表現力」を掲げているので、「国語表現」を履修させよう

履修科目・年次検討時の 3つの視点

新学習指導要領で新たな科目が設置される教科を中心に、今後、履修科目・年次の検討を行う際に重要となる視点として、次の3つを提示します。

3つの視点を踏まえて改めて見る、本特集の事例

事例1 山形県・私立山形城北高校

育成を目指す資質・能力として、資質・能力の3つの柱とOECDの「非認知スキル」を設定。各科・コースの特徴を生かした教育課程とするため、就職試験や総合型選抜・学校推薦型選抜で志望理由書などを書く機会が多いコースでは、3年次に「国語表現」を履修させるようにし、大学入試受験者が多い科・コースでは、2・3年次に「古典探究」を履修させるようにした。さらに、土曜日の授業を課外にすることで部活動に参加しやすくするなどの改革を推進する。

【詳細はP.6～9】

事例2 山梨県立吉田高校

育成を目指す資質・能力（吉高GP）を踏まえ、現行の教育課程のよさをできる限り生かしながら、3年間の学びを通じた生徒の成長という縦軸と、教科連携による学びの相乗効果という横軸を意識して教育課程を編成。その特徴の1つとして、富士山や富士吉田市を題材とした「総合的な探究の時間」（「富士山学」）を軸に、「地学基礎」「情報Ⅰ」「理数探究」を1年次に履修させるようにするなど、各教科・科目の連携を発展させた点が挙げられる。

【詳細はP.10～13】

視点 3

生徒の希望進路の実現から考える

教育課程は、生徒の希望進路の実現を支援するものでもあることから、その編成においては、就職先の仕事の実態や業界の課題を理解したり、進学先となる大学などの選抜試験で課される科目を確認したりすることなどを通じて、生徒の進路先でどのような資質・能力が必要とされているのかを把握することが重要です。「国語の選択科目は、大学入試で課されると予想される『論理国語』『古典探究』を履修させる」「国立大学志望者が多い本校は、大学入学共通テストの出題科目として検討されている『数学C』を、文系も履修させる」といった方針を打ち出している学校もありますが、入試科目は、大学での学びや社会において、どのような資質・能力が必要なのかを伝える、大学からのメッセージです。入試で必要とされるからということだけではなく、その科目を入試で課すことを通じて、生徒のどのような資質・能力を見ようとしているのかを教師間で理解した上で、視点1や視点2も踏まえて、教育課程に組み込むことが求められます。

視点 2

「総合的な探究の時間」を要に教科等横断的に考える

各教科間はもちろん、新学習指導要領解説総則編に「総合的な探究の時間において教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習が行われるようにすることなど、教科等間のつながりを意識して教育課程を編成することが重要」とあるように、「総合的な探究の時間」を要に各教科等を有機的につなぐことができれば、自校が教育目標に掲げる資質・能力を育成する教育課程の実現に近づくでしょう。

例 「総合的な探究の時間」×「数学I」×「公共」×「情報I」

「総合的な探究の時間」でデータの分析方法や情報モラルといったスキルや知識が必要になるため、それらが学べる「数学I」（データの分析）、「公共」（情報モラル）、「情報I」は1年次に履修させる。

例 「情報I」×「数学A」

「情報I」の「コンピュータとプログラミング」の内容に含まれる「モデル化とシミュレーション」は、「数学A」の「場合の数と確率」と関連が深いことから、「情報I」は1年次に履修させる。

生徒が自由に使える可処分時間の確保や教師の「働き方改革」の推進なども考えると、教育課程編成で「できること」の限界を感じるかもしれません。しかし、生徒の資質・能力を育むカリキュラムは、教育課程を含む教育活動の総体で実現されるものです。どのような資質・能力を、どの時期に、どの分野・単元において、どんな指導・教育活動を通じて育成するかを、シラバスなどに整理をして、それを教師・生徒が共有し、さらに学習評価も充実させることで、教育課程は真にその力を発揮します。新学習指導要領の実施まで1年を切った今、教育課程に命を吹き込む取り組みが、各校に求められているのではないのでしょうか。

教育課程の

確定に向けて

大切にしたいこと

3つの視点とともに、各年次の総単位数や教員配置などの観点も踏まえて調整しながら、教育課程を確定させる上で大切にしたいことをお伝えします。